

おおしまはたけだ
大島畠田遺跡

農用地総合整備事業「都城区域」区画整理に伴う発掘調査概要



2000

宮崎県埋蔵文化財センター

『大島畠田遺跡 概要報告書』正誤表

頁	挿図・図版・表番号	行・欄・遺物番号	誤	正
6	第3図	西下部の掘立柱建物	S <u>E</u> 33	S <u>B</u> 33
8		6	IV類：N- <u>10</u> °	IV類：N- <u>7</u> °
8	大島畠田遺跡掘立柱建物跡等一覧	22	<u>E</u> -7° - <u>N</u>	<u>N</u> -7° - <u>W</u>
11		6	<u>N</u> -8° - <u>E</u>	<u>E</u> -8° - <u>S</u>
11		7	<u>N</u> -14° - <u>E</u>	<u>E</u> -13° - <u>S</u>
11		9	<u>N</u> -8.5° - <u>E</u>	<u>E</u> -8.5° - <u>S</u>
12	主な溝の切り合い関係	15	S <u>B</u> 25・30を切る。	S <u>E</u> 25・30を切る。

序

本書は、農用地総合整備事業に伴う大島畠田遺跡発掘調査成果の概要を報告するものです。

大島畠田遺跡では、平成11年1月から発掘調査を開始しまして、弥生時代、古代～中世の遺構・遺物を検出いたしました。中でも大型建物跡、池状遺構、門、区画溝など9世紀から10世紀にかけて作られた有力者の屋敷跡が発見されたことは意義深いものがあり、全国的に注目を集めています。このように、地方有力者の居館跡全体を復元できる遺跡としては、全国的にも類例の少ない重要な歴史遺産であることをかんがみ、関係機関、地権者の方々との話し合いの結果、遺跡を保存することができましたことは喜びに堪えません。

調査および遺跡の保存にあたりましては、緑資源公団、都城市をはじめ地元関係者の方々には、深い御理解と御協力を賜りました。心から謝意を表しますとともに、将来にわたり、この遺跡の有効な保存・活用がなされますよう御協力・御指導下さるようお願い申し上げます。

平成12年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長 田 中 守

例 言

1. 発掘調査は、宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
2. 調査地は宮崎県都城市金田町字畠田に所在する。
3. 土師器、越州窯系青磁、白磁の年代については、山本信夫氏（太宰府市教育委員会）の御教示による。
4. 緑釉陶器、灰釉陶器の年代や産地については、井上喜久男氏（愛知県陶磁資料館）の御教示による。
5. 裏表紙の遺構復元図については、狩生佳代子氏にお願いした。
6. 本書に掲載した遺構実測図は、和田理啓、柳田宏一、日高広人、福田泰典、高橋 誠、久木田浩子、甲斐貴充、橋川敬子、下田代清海、廣田晶子、柳田晴子、谷口武範が作成し、橋川、谷口が製図した。
7. 本書に使用した写真は、柳田宏一、橋川、谷口が撮影し、空中写真については株式会社マエダに委託した。
8. 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行った。遺物の実測・トレース・写真撮影は柄本久子、長友直美、長峰まり子、谷口が行った。
9. 本書で使用したレベルは海拔絶対高であり、基準方位は座標北である。
10. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
SB・・・掘立柱建物跡 SC・・・土坑 SE・・・溝状遺構 SL・・・池状遺構
11. 本書の執筆・編集は、谷口が行った。
12. 出土遺物・その他諸記録は宮崎県埋蔵文化財センター分館（宮崎市神宮2丁目2-4）に保管している。

I. はじめに

1. 調査の経過

緑資源公団（旧農用地整備公団）において、農用地整備事業として農業生産性の向上・農業経営の安定を図る圃場整備事業（204ha）やそれに伴う農産物流通の迅速化を目指した広域農道（総延長19.1km）建設が計画された。まず、平成5年11月に農用地整備事業の予定地内の文化財の所在の有無について、九州農政局南部九州土地改良調査管理事務所長より県文化課に依頼があり、平成6年3月に遺跡数33箇所、試掘調査必要な29箇所を回答した。以後、発掘調査面積の平準化や調査員の確保などの問題について継続して協議を行ってきた。

大島畠田遺跡は、「大島団地」圃場整備事業として計画され、平成6年12月～平成7年1月にかけて行われた試掘調査によって古代の遺構・遺物等が確認された。

平成10年12月に再度、確認調査を実施し、遺跡保存のため工事計画との協議を行い、影響を受ける約6000㎡について調査を実施することとなった。

調査は平成11年1月13日から開始した。調査を進めるうち、大型の建物や多くの建物群、門、区画溝、道状遺構など予想を大きく上回る重要な遺構・遺物が検出された。調査中、遺跡の評価や調査の進め方など奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターの山中敏史先生や柳沢一男宮崎大学教授、ほか多くの県内外の研究者や文化財担当者の訪問を受け貴重な意見を賜った。そして、遺構の広がりから調査区域を8000㎡に拡大し調査を進めるとともに、公団と工事施工の変更など遺跡保存するための方策についても協議を開始した。

また、遺跡の全容が把握できた平成11年9月5日には、現地説明会を実施し、あいにくの天気にも拘わらず県内外から500名を超える多数の参加者があり、地域の人々の関心の高さを知ることになった。

さらに平成11年9月25日には、文化庁坂井秀弥調査官が来跡され、遺跡の重要性について高い評価をいただき、保存・整備の検討を要請された。これを受け、県文化課、都城市では、遺跡の保存について、公団および地元の方々との話し合いを数度にわたり行い、最終的には公団が遺跡を含む約2.5haについて事業区域から除外し、都城市が買い上げる方向で検討していくことで御了解いただいた。

このため調査を途中から保存を前提としたものに切り替え、遺構の分布状況や切り合い関係などの把握に主眼をおき、屋敷地の広がりを確認するため北側に調査区を拡張した。結果は、検出した遺構のほとんどが江戸時代以降のもので、屋敷地に伴うような遺構については確認できなかったため、今後の検討課題として残った。平成11年1月から開始した調査は、予想を上回る遺構の検出と調査区域の拡大、遺跡保存へ向けての協議、さらに夏の度重なる台風、長雨などの影響で当初の予定より大幅に遅れ、平成11年11月9日に終了した。

そして、地権者の御理解のもと遺跡保存のため平成12年1月4日より2月12日まで、調査区全体をシラスで約20～30cmほどの厚さで被い、表土の埋め戻し作業を行い現状に復した。

今後は、都城市教育委員会を中心に、遺跡の広がりなど周辺地域の調査が行われていく予定である。



現地説明会風景

II. 調査体制

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長 笹山竹義
教育次長 新垣隆正
岩切正憲

調査総括

文化課長 仲田俊彦
庶務係長 井上文弘
埋蔵文化財係長 北郷泰道
調整担当 長津宗重 (平成10年度)
東 憲章 (平成11年度)

調査・整理

宮崎県埋蔵文化財センター

所 長 田中 守
副所長 江口京子 (平成11年度)
庶務係長 児玉和昭
主任主事 吉田秀子 (平成10年度)
主任主事 磯貝政伸 (平成10年度)
主事 平田ユミ子 (平成11年度)
主事 上野広宣 (平成11年度)
埋蔵文化財第二係長
青山尚友
主査 柳田宏一 (平成11年度)
主査 谷口武範
主事 和田理啓 (平成10年度)
調査員 橋川敬子

調査指導協力 小林 克 (文化庁) 坂井秀弥 (文化庁) 山中敏史 (奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター)
柳沢一男 (宮崎大学) 野口 実 (聖徳大学) 永山修一 (ラサール学園) 柴田博子 (宮崎産業
経営大学) 山本信夫 (太宰府市教育委員会) 大久保徹也 (徳島文理大学) 池畑耕一 (鹿児島
県教育委員会) 井上喜久男 (愛知県陶磁資料館) 木村幾多郎 (大分市歴史資料館)
中西武尚 (大分市歴史資料館) 若山浩章 (宮崎海洋高校) 赤川正秀 (大刀洗町教育委員会)
重永卓爾 (都城市史編纂室)

調査参加者 有水ノブ子 安藤キヌ子 石原シズ 今別府一夫 今別府シヅエ 今山義秋 岩切数秋 岩本泉
栄福正信 大峯端義 大峯ミサエ 大盛カズ子 大山ミツ子 岡川ふさ子 岡元チサ子 岡元秀夫
梶原節 川崎アツ子 川野春信 神田橋幸子 北迫忠作 木山広文 木山藤則 清田ムツ 久留保
隈元イクコ 隈元正 黒木悦子 小村利雄 佐々木敏夫 嶋木止 清水勝則 正ヶ峰ミサ子 新宮
律子 瀬之口藤則 高橋露子 高橋時盛 武石重利 竹之下ミサエ 竹脇卯治 立石和子 田中育
子 田中敏子 田中まり子 谷山トミ子 田ノ上恵子 当房正雄 永田澄利 永田義晴 長友健
長友幸雄 中村ゆう子 中村義教 野崎ハツエ 野間文子 橋口みどり 原口智子 平田トミ子
平田美智子 福井ミチエ 福岡悦雄 福岡咲子 福山真知子 別府由美子 松崎アヤ子 松原光治
松原義輝 松原義洋 松元幸子 三浦サダ子 三島淑子 山崎龍平 山下アヤ子 山下泰雄 山添
みどり 山中輝雄 山中ユリ 横市カツ 横市義光 吉川アヤ 吉永美登志 吉永フサ子 吉村准利

遺跡保存のためにいろいろご尽力いただいた換地委員の方々には厚くお礼申し上げます。

都城市教育委員会文化課および畑地かんがい推進課の方々には、調査について御指導、御協力をいただくとともに、
保存協議についても多大な御尽力をいただいた。また、関係各位の援助と調査員諸氏の多大な協力のおかげで調査の
進行が進められてきたことを感謝します。

Ⅲ. 遺跡の位置と環境

遺跡は、都城市^{かなだ}金田町字畠田に所在し、大淀川と庄内川との合流地点に形成された沖積地の微高地（標高133.80～133.0m）上に立地している。西側に広がる大淀川氾濫原とは約1.5m比高差を測る。遺跡周辺の現況は昭和初期の基盤整備によりほぼ平坦な水田であるが、遺跡の北側の集落（標高約136m）から緩やかに南に傾斜した縁辺部に遺跡は位置している。また、遺跡の南にある舌状台地の北側裾部には確認調査により小規模な谷が入り込み、水田として利用されていたことも判明した。さらに、航空写真をみると遺跡周辺はあちこちに旧河川の痕跡が認められ、発掘調査により調査区東から南にかけて旧河川と考えられる凹地も確認されている。このように、遺跡は氾濫原の中、大淀川に面したわずかに高く見透しのよい箇所を選んで形成されていたことが理解できる。

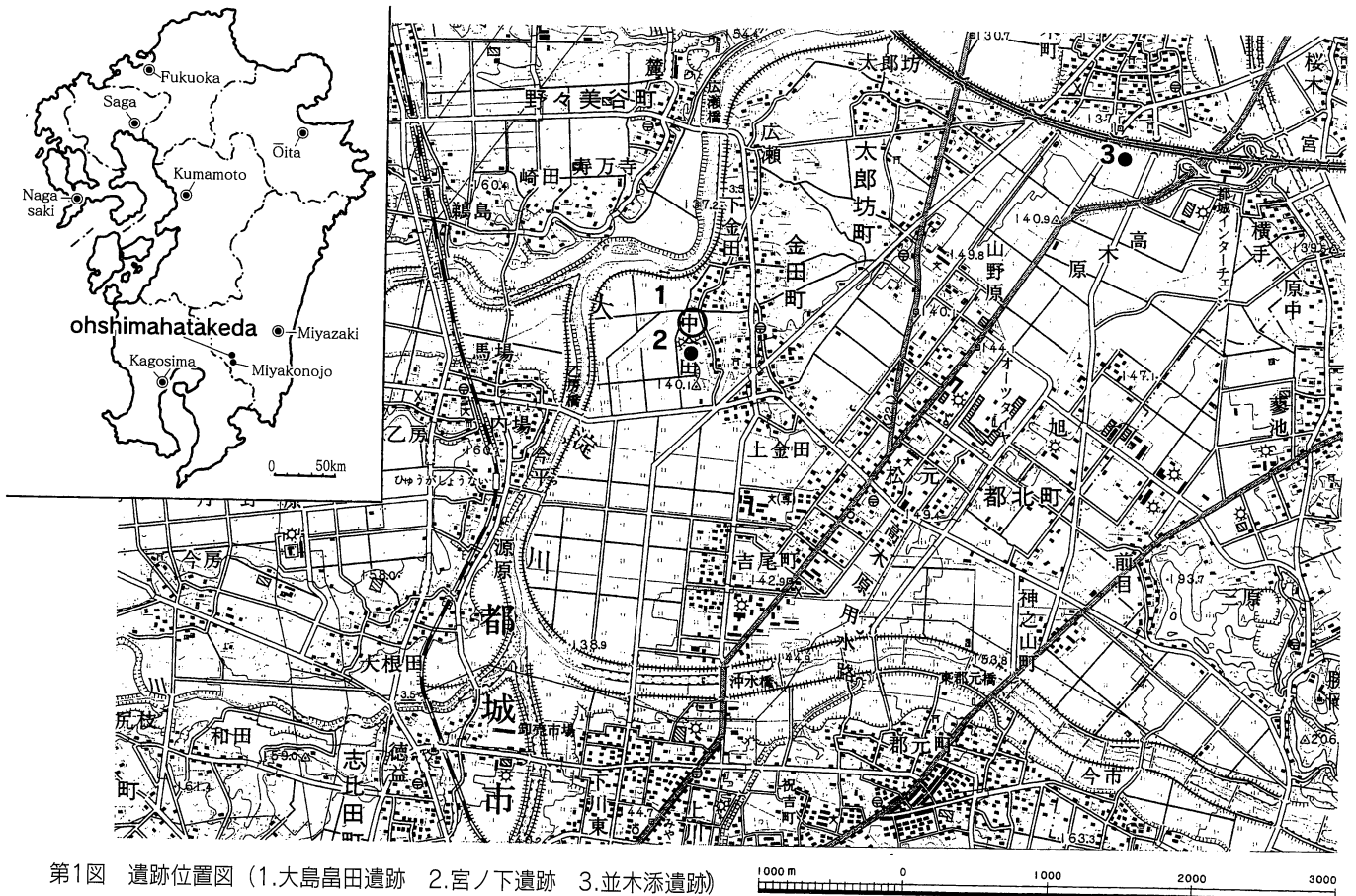
遺跡のある大淀川東岸地域は、これまで、氾濫原地帯が大半を占め、さらに昭和初期に水田耕作の土地改良が完了していることなどから、丘陵上や微高地においてわずかに中世の遺跡が確認されているにすぎなかった。しかし、今回の発掘調査結果や遺跡の北東集落の屋敷内開墾中に軽石製の五輪塔が多数出土するなど、周辺地域には分布調査では発見されなかった多くの古代～中世の遺跡が存在すると考えられる。

周辺遺跡としては、大島畠田遺跡の南に延びる舌状丘陵の縁辺部に立地する宮の下遺跡があり、公園整備事業に伴い平成3年に調査が行われ、弥生時代後期の住居跡1軒、包含層からは古代末～中世の須恵器や土師器などが出土している⁽¹⁾。また、宮崎自動車道都城インターチェンジに西に隣接した並木添遺跡^{なみきそえ}では、平安時代の道路遺構が検出されている⁽²⁾。さらに「延喜式」に記載された島津駅の比定地と推定される郡元町は、遺跡の南東約3kmに位置し、遺跡一帯が交通の要所であったことがうかがえる。

また、文献資料からみると、島津荘は万寿年間（1024～28）に大宰大監^{たいらのすえもと}平季基が一族や近隣有力者の協力を得て島津荘周辺の荒野を開拓し、関白藤原頼通に寄進して成立したとされる。さらに時代がやや下るが、平季基の系譜を引く日置（北郷）氏系図によれば、12世紀後半頃「兼房、金田領主」とあり、金田町一帯はこのような領主が置かれるほど重要な地域であったことが想定される。

註

- (1) 『宮の下遺跡』 都城市文化財調査報告書 第13集 都城市教育委員会 1991
- (2) 『並木添遺跡』 都城市文化財調査報告書 第24集 都城市教育委員会 1993
- (3) 『宮崎県史 通史編 中世』 宮崎県 1998



第1図 遺跡位置図 (1.大島畠田遺跡 2.宮ノ下遺跡 3.並木添遺跡)



遺跡遠景
(西より)



遺跡遠景
(南より)

IV. 調査の概要

遺跡は、大淀川氾濫原が西側に大きく開けた標高約134mの微高地上に形成されている。しかし、昭和初期のほ場整備によって、遺物包含層および遺構上部は削平されて、表土（耕作土）除去後すぐに遺構が確認された。なお、調査区北西隅は、すぐに自然礫層が露出し、遺構は削平され残存していなかった。

古代～中世の遺構としては、掘立柱建物跡35棟、土坑約30基、溝状遺構約40条、池状遺構1基、柵列、道状遺構1条のほか意味不明の土坑数基があるが、調査を途中から保存に向けての調査へ変更したため、数量や性格については今後の調査によって変更されていくものである。



平安時代の屋敷地は、調査区の中央から北西にかけて発見され、北側については不明であるものの、東：自然地形の凹地、南：SE2とした区画溝や門、柵列、西：大淀川の氾濫原というように遺構や自然地形を利用した区画がなされ、その範囲はおおよそ東西約70m、南北80m+ α の広さ（約5600㎡）であることが推定される。屋敷地を構成する遺構としては、大型建物、掘立柱建物跡、池状遺構（後に「コの字」状の区画溝となる）および、門、区画溝、柵列などあるが4～5時期に分かれると考えられる。なお、今回の調査では、井戸や厨、生産遺構等については発見されていない。また、道状遺構やSB18・21・22については出土遺物から、屋敷地よりは時代が下がるものである。ほか江戸時代の遺構は主に調査区の北側（拡張区）に集中し、墓壙約40基、溝状遺構10数条、土坑10数基が検出された。



遺跡全体写真

1. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡35棟を確認したが、建物を復元できなかった柱穴等も多数存在する。柱穴の柱痕跡は、平面あるいは断面で確認でき、桁行の柱間寸法は大まかには2.3~2.5mを測るものが多い。掘立柱建物跡は主軸によりおおよそⅠ類：N-10°-E、Ⅱ類：N-7°-E、Ⅲ類：N-13°-E、Ⅳ類：N-10°-Wの四つに分類できる。Ⅰ~Ⅲ類については、区画溝や東側の凹地に囲まれたいわゆる屋敷内のみ分布し、特にⅢ類については、規格性のある建物配置がなされている。建物規模は、SB1を除いて、40㎡代、30㎡代、20㎡代、10㎡前後の建物に分かれ、20㎡代が最も多い。10㎡前後は倉庫として想定される。建物群の時期差・変遷については、検討中であるため明確にできないものの、遺構等の切り合いからⅠ類→Ⅱ類→Ⅲ類となる可能性が高い。Ⅰ~Ⅲ類は、出土遺物から9世紀後半から10世紀前半までの時期を想定しているが、Ⅳ類は出土遺物（第5図8）から12世紀前半まで下る。

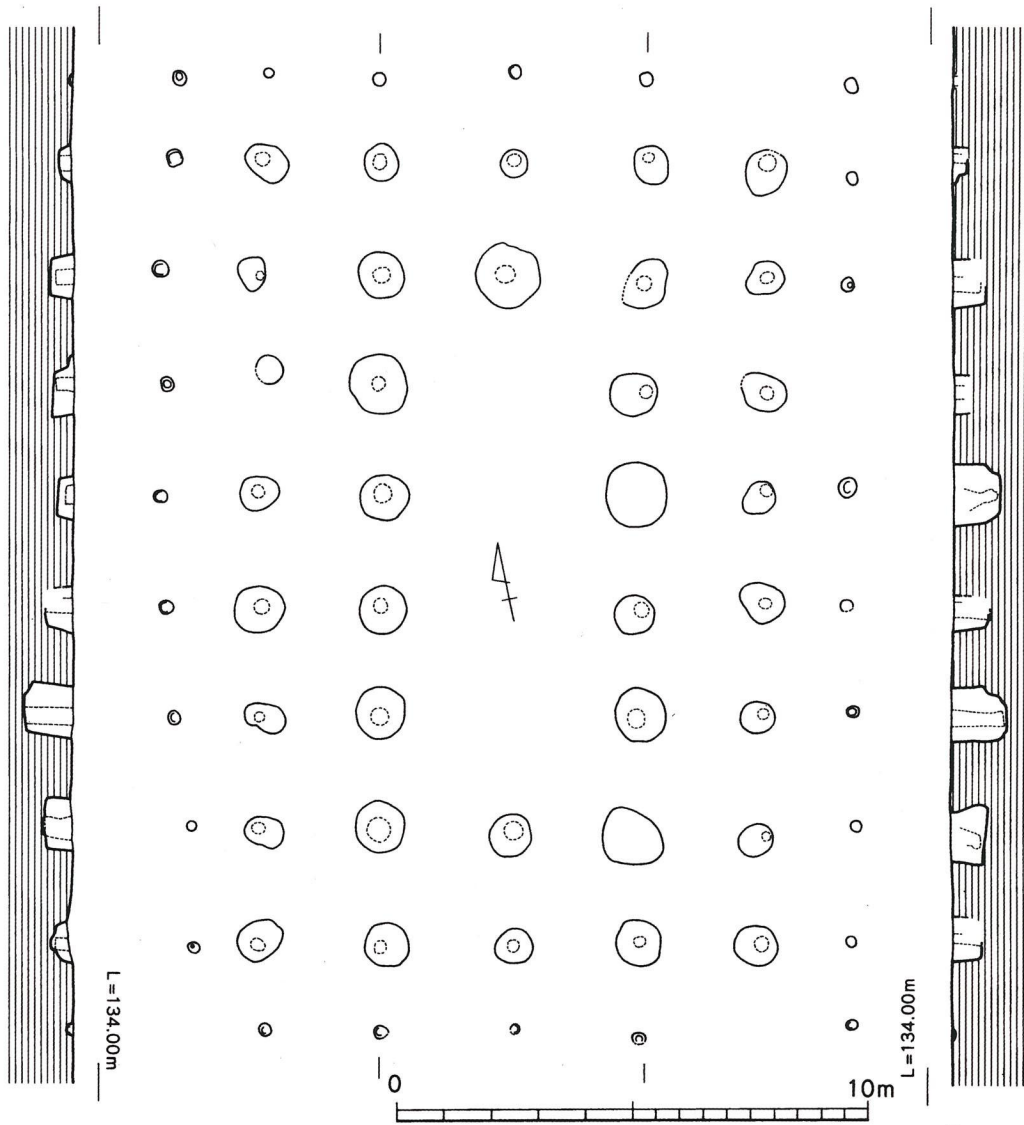
Ⅲ類に分類される大型建物（SB1）は、掘立柱建物跡群の最北端に位置し、四面庇の外側にさらに縁あるいは軒先きの柱と推定される小柱穴が廻る。身舎部分の柱穴は、柱の周囲を突き固めた状況も明確で、底面は自然礫層まで掘り込み、礎石としての役割を持たせていたと考えられる。柱穴からは、完形に近い土師器杯や越州窯系青磁片などが出土している（第5図1）。

遺構	主軸	面積 (㎡)	規格	備考
SB1	N-13°-E	63 (身舎) 183 (庇)	2×5間	四面庇・周囲に軒先き廻る SB10・11を切る
SB2	N-13°-E	33.75	2×3間	東側に庇SE9に切られる
SB3	N-7°-E	48.62	2×5間	SB4・13と重複
SB4	N-9~10°-E	39.48	2×4間	SB3・13と重複
SB5	N-13°-E		2×3?間	SB9・14と重複
SB6	E-13°-S	28	2×3間	SB14 SE6を切る
SB7	E-10°-S	14.08	2×2間	SE8と重複
SB8	N-10°-E	24.7	2×3間	
SB9	E-6°-S	15.91	2×4間	
SB10	N-10°-E	24.18	2×3間	SB1に切られる
SB11	N-10°-E	20.14	2×2間	SB1に切られる
SB12	N-11°-E	25.16	1×3間	SB1 SE9と重複
SB13	N-8°-E	11.6	1×2間	SB3・4と重複
SB14	E-10°-S	41.45	2×4間	SB6・SE10に切られる
SB15	E-6°-S		1×?間	
SB16	N-13°-E	23.45	2×4間	
SB17	E-10°-S	32	2×3間	SE1に切られる
SB18	N-7°-W	15.85	2×3間	
SB19	N-14°-E	23.76	1×3間	庇を持つか?
SB20	E-11°-S	23.04	2×4?間	SE4・5に切られる
SB21	E-7°-N	19	2×3間	
SB22	N-7°-W	29.5	2×2間	
SB23	E-12°-S	45	2×6間	SB24・25 SE4・5と重複
SB24	N-12°-E	28.49	2×4間	SB23 SE4・5と重複
SB25	E-12°-S	8.2	1×2間	SB23と重複
SB26	E-6.5°-S	24.8	2×3間	SB27と重複
SB27	E-15.5°-S	27.2	2×3間	SB26と重複
SB28	N-11°-E		1×2?間	
SB29	N-11.5°-E	13.5	1×3?間	SE9に切られる
SB30	E-8°-S	10	1×3間	
SB31	N-8°-E	15	2×2間	SE8に切られる総柱
SB32	N-10°-E	19	2×2間	総柱
SB33	E-3°-S	26	2×3間	
SB34	E-6.5°-S		2×3?間	
SB35	N-13°-E	11.55	1×1間	お堂?主軸不確定
門	N-8~9°-E			SE3・6を切る
SE2	E-8°-S			SE2と重複 SE3を切る
欄列1	E-13°-S			
欄列2	E-8.5°-S			

大島畠田遺跡掘立柱建物跡等一覧



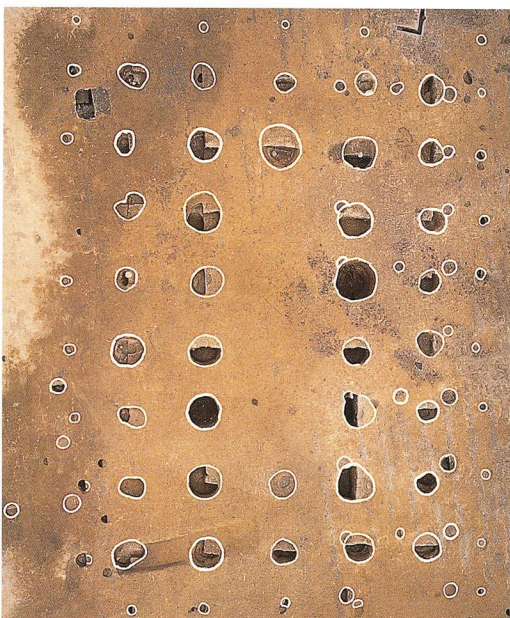
遺構検出状況(西より)



第4図 SBI 遺構実測図

1号独立柱建物跡柱穴規模 (主軸 N-13'-E)

		梁行 (m)	桁行 (m)	柱穴径 (m)	柱穴跡径 (m)	深さ (m)
身舎	2間×5間	5.6 (2.6)	11.8 (2.4)	0.9~1.3	0.3~0.5	0.8~1.4
庇	4間×7間	10.8	16.7	0.7~1.0	0.2~0.3	0.5~0.8
縁?		14.5	20.5	0.2~0.3	0.1~0.15	0.2~0.3



SBI (大型建物)



柱穴検出状況



柱痕跡の状況

2. 池状遺構

大型建物（SB1）の南側に位置し、東側をSE7に切れ、そのほかSE3・6・8など複数の溝と切り合っている。名称を池状遺構としているが、明確な証拠は得られていない⁽¹⁾。形態としては、不定形の溝を周囲に掘り巡らし、中央に地山を残すいわゆる周溝状遺構としても考えられる。周溝の掘り込みは、北（幅約4m、深さ約0.35m）、東（推定約3m、深さ約0.5m）、南（約2.5m、深さ約0.4m）と方形の区画状に巡るが、西側は、不定形で幅約8m、深さ約0.7mとかなり広く掘られている。さらに、周溝埋没後、中ノ島状に掘り残された箇所を再利用して、北側が開いた「コ」の字状の区画溝が設けられる。この区画溝は、発掘当初は明瞭であったが、乾燥するにしたがい肉眼で確認が困難になってしまい土層断面のみで判断し、一辺約10m、幅約2.5m、深さ約0.4mと推定される。中央部は、地山が掘り残され、一辺7.5mの方形の中ノ島状をなすが、これは当然のことながら「コ」の字状の区画の段階の大きさである。溝発掘中、埋土から多量の河原石（10～30cm）が検出されていることから、中ノ島部分に葺石されていたと考えられる。なお、平安京などでみられる洲浜状の敷石はみられなかった。中ノ島部分には、いくつかの柱穴があり、SB35とした建物は、1間×1間の建物で、柱の大きさや深さは大型建物のそれと非常に類似し、主軸も同様な方向を示している。

遺物は、一括で多量に廃棄されたり、まとまって出土するのではなく、流れ込みのような状況で破片や完形品などが埋土の上下から検出されている。出土遺物としては、土師器坏類が最も多く、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、越州窯系青磁、灰釉陶器、白磁、布痕土器、鉄製品、土錘があり、木簡や仏具など祭祀的遺物はみられなかった（第5図9～24）。中に、数点墨書土器があり、『#』（第5図13）や『泉』と書かれたものが出土している。

註

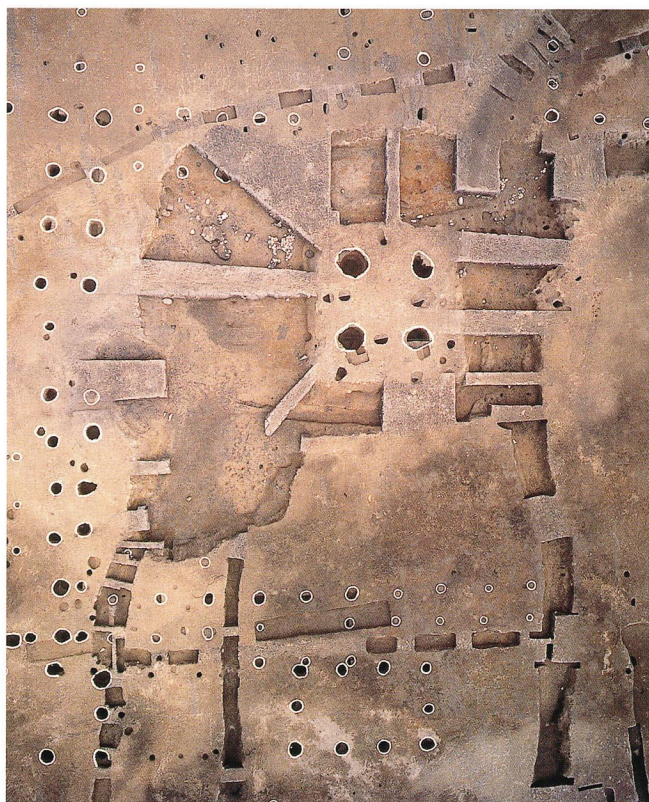
(1)自然科学分析の結果、湿潤～湿地の堆積環境が推定されるが、池沼を示す珪藻類が少なく、時期や季節によって短期間帯水する程度と考えられる。さらに堆積層から多量のイネが検出されており、遺構の性格を再検討する必要がある。



SB35
柱穴半載状況



池状遺構検出状況
(池埋没後コの字状の区画が作られている)

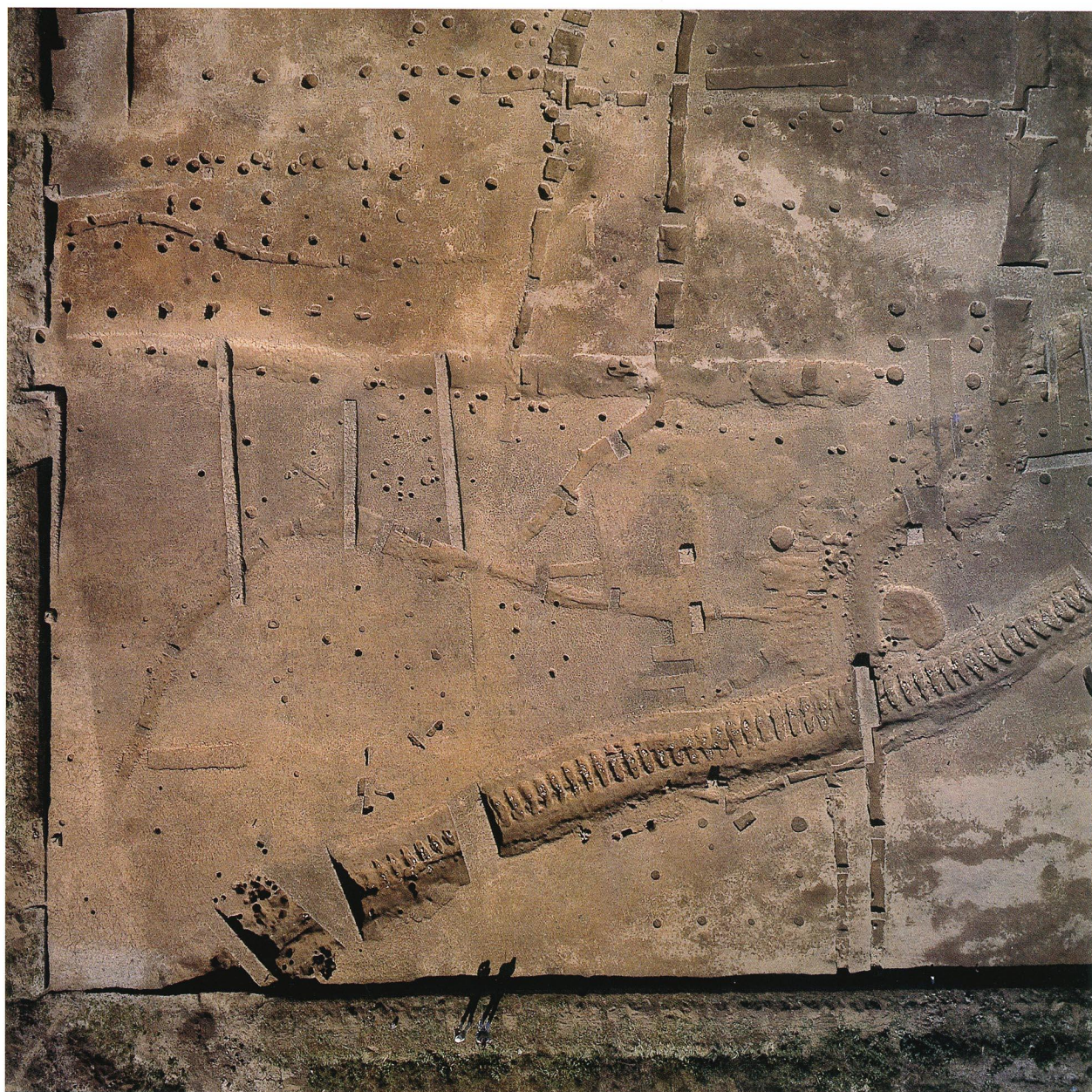


池状遺構発掘状況

3. 区画溝・門・柵列

調査区の南西部分、屋敷地の南側を区画する遺構が、東側から延びてきた浅い凹地のすぐ北に検出されている。区画溝は長径約2m前後の不定な楕円形の土坑をつないでいく掘削の工法が用いられ、床面形態や深さも一様でないが、現存長約38m、幅約2.3m、深さ0.2~0.50mを測る。途中2.5mの幅で陸橋部が残されている。区画溝の内側に土塁が存在していた可能性もあるが、溝の埋土等からはそれを想定できるような資料は得られなかった。主軸はおおよそN-8°-Eと掘立柱建物跡のⅡ類と同時期と推定される。柵列1は15個の柱穴からなり、柱穴径は30cm前後、深さ40~50cm、柱間寸法は2.6~2.7m。主軸はおおよそN-14°-Eと掘立柱建物跡のⅢ類と同時期と推定される。SE3より新しい。柵列2は、区画溝が切れている箇所（陸橋部）とはややずれた位置に作られ、柱穴5個からなる。柱穴径は30cm前後、深さ30~40cm、柱間寸法は2.3~2.4m。主軸はおおよそN-8.5°-Eと掘立柱建物跡のⅠあるいはⅡ類と同時期と推定される（第3図の遺構分布図ではⅡ類に分類）。門は区画溝の切れた東端部分に位置する。四脚門と推定され、柱穴径は70cm前後、柱痕跡20cm前後、深さ20~30cm、柱間寸法は梁（東西）が3.6m、桁（南北）が、1.7m。主軸はおおよそN-8°-Eと掘立柱建物跡のⅡ類と同時期と推定される。

これら区画する遺構は、SE7と接する西側ですべて止まり、その東側には明確な区画する遺構は検出されていない。このことは、屋敷地の範囲や門や柵列の意味付けなど重要な問題を含んでいる。



遺構検出状況(南西部分)

4. SE1 (道状遺構)および溝状遺構

SE1は調査区の南西隅から北東に向って蛇行しながら延び、凹地に接する付近で消失している。直線距離で約57m、検出面での規模は、溝の幅2.5~3.5m、深さ0.08~0.58m、南西端と北東端部の床面の比高差は約0.42mと、北東部へ向かって高くなる。溝の断面形は幅広のU字状をなし、主に黒褐色土や灰褐色土が堆積する。溝床面には、溝の走行と直行して不定形の楕円形を呈したいわゆる波板状の凹凸がほぼ全体に連続して掘られる。この波板状遺構は長さ1.0~1.5m、幅0.4~0.6m、深さ0.05~0.20mを測り、その間隔は、接していたり、30cm前後の間隔をもつものなど一定ではない。そして、北東部分では一部波板状遺構が重複していることから、数回に及ぶ道の改修が行われていた可能性がある。また、溝内部に明確な硬化面は確認できなかったが、波板状の覆土やその間のわずかな部分に硬化した層が認められた。

波板状遺構の床面より5~15cmの礫や摩耗した土師器小片、玉縁白磁碗の口縁部(第5図28~30)、外面に耳の付く石鍋片(第5図31)などが出土していることから、遺構は、屋敷地よりは時代が下り12世紀前後と想定される。

遺構が氾濫原の方向に延びているということは、大淀川からの荷物の搬入・搬出が目的で作られたと考えられ、その荷物の集積地は、遺跡の南に広がる現在の集落部分に形成されていたと想定される。

その他、溝状遺構は40条程度検出されているが、その多くは、完結せず遺構に切られたり、途中で消失したりして、その性格などを把握するにいたっておらず、いくつかは同一の溝状遺構である可能性もある。さらに、溝の断面を観察すると、数回にわたり使用されていた形跡のものが多く見られた。また、溝状遺構が凹地を横断して作られていないことや掘立柱建物跡の分布状況から、凹地は当時から存在していて、何らかの区画の役割を担っていたと想定される。遺物としては、土師器、黒色土器、白磁、須恵器などが出土している(第5図25~32)。

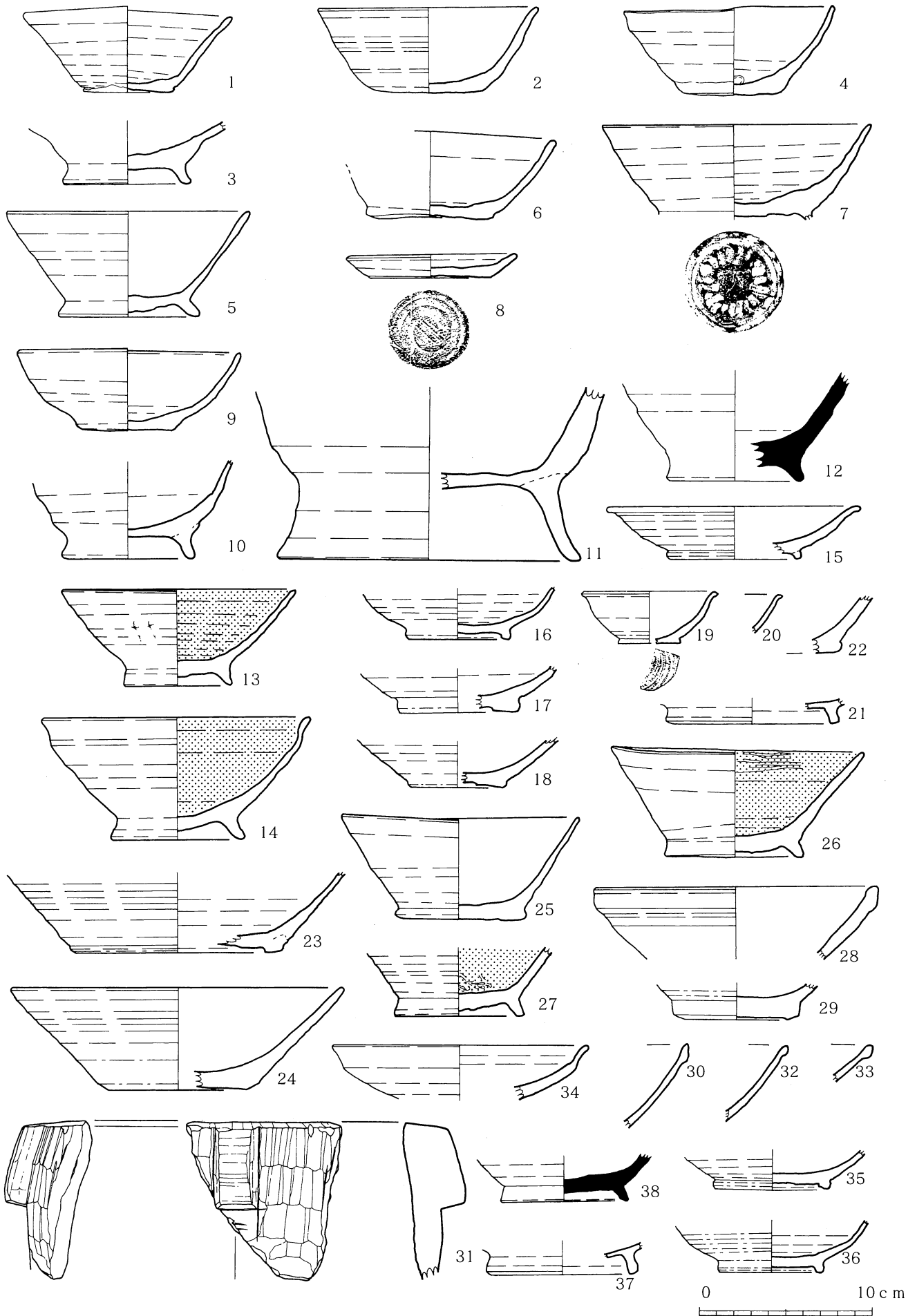
主な溝状遺構の切り合い関係については右表を参照されたい。表右の○印は古代、中世の遺物が比較的まとまって出土している遺構に付した。



道状遺構発掘状況

主な溝の切り合い関係

遺構番号	切り合い関係	古代	中世
SE1	SE7 SE30を切る。	○	○
SE2	SE3 SE6を切る欄列1との関係不明。	○	
SE3	SE2 SE8・池・欄列1に切られる。	○	
SE4	SE5・SE27に切られる。池を切る。	○	○
SE5	SE27に切られる。SE4・池を切る。	○	○
SE6	SE2 SE8・池に切られる。	○	
SE7	SE12・池を切る。SE1・28に切られる。	○	○
SE8	SE3・6を切る。池・SE7に切られる。	○	
SE9	SE4・5・27に切られる。		
SE10	SB14を切る。		
SE11	SE12 SZ1を切る	○	
SE12	SE11・7 SZ1・3に切られる。	○	
SE13	溝か?		
SE14	SB25・30を切る。		
SE15	北に曲がって終わる。		
SE16	SE7に切られる?		
SE17	SE7に切られる?		
SE18	SE16・17を切る。SE7に切られる?		
SE20	くぼ地東側に位置する。		
SE21	くぼ地東側に位置する。		
SE22	くぼ地東側に位置する。		
SE23	SB18と重複。		
SE25	SE30を切る。SE14に切られる。	○	
SE26	SE30を切る。		
SE27	SE4・5 池を切る。文明ボラ混入。		
SE28	SE7・9 SB19・20を切る。		



第5図 出土遺物実測図

1SE1 2SE3 3SE4 4SE5 5SE6 6SE9 7SE14 8SE18 9~24 池状遺構 25~27 SE3 28~31 SE4 32 SE8 33~38 包含層
 土師器1~11・25 黒色土器13・14・26・27 須恵器12・38 緑釉陶器15~19・34~36 灰釉陶器20・21・37 越州系青磁22~24 白磁28~30・
 32・33

6. 出土遺物

遺物の多くは、包含層が削平されているため、東側凹地包含層中や池状遺構、溝、柱穴などの遺構から出土した。古代～中世の土器類としては、土師器が最も多く全体の8割程度を占め、黒色土器、須恵器、布痕土器、緑釉陶器、越州窯系青磁、白磁、灰釉陶器の順に出土している。特に、破片ではあるが緑釉陶器約60点、越州窯系青磁約40点、白磁約30点、灰釉陶器約10点と県内ではずば抜けた出土量をほこっている。土師器類では坏が最も多く、甕類は少ない。須恵器は、坏類は少なく甕が多い。緑釉陶器は、一部時期的に上る長門産のものがあるが、大部分は京都産（洛西）が占めている。灰釉陶器は、緑釉陶器に比べ非常に少なく、K-14～K-90形式のものがある。越州窯系青磁はI類やII類の碗類が、白磁は小さな玉縁のI類や時代の下る大きな玉縁のIV類が出土している。また、池状遺構と凹地包含層から「泉」（2点出土）、ほか「春」などの墨書土器も10点程度みられる。そのほか、石鍋、軽石製石製品、土錘、鉄製品、鉄滓、フイゴの羽口、銅滓、弥生中期の土器や石器類がある。

このように陶磁器類からみた年代としては一部、9世紀前半に上るような遺物もあるが、多くは9世紀後半～10世紀前半を中心とした時期が想定される。土師器類も同様な時期と考えられるが、特に9世紀後半前後の土器として、口径・器高に比べ底径が小さいもの（1）、高台内に花びら状の痕跡を残すもの（7）、内湾しながら立上るもの（9）、円板状の底部（25）など特徴的な形態を手がかりに、周辺遺跡との比較検討を早急に行っていきたい。



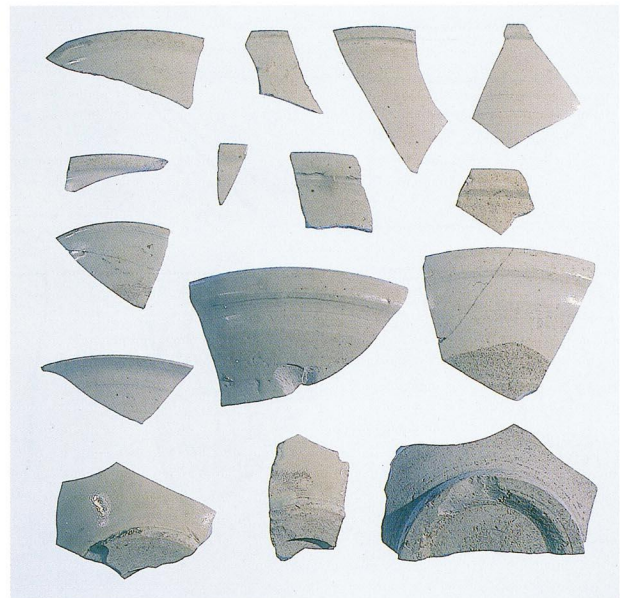
緑釉陶器



越州窯系青磁



墨書土器



白磁

V. おわりに

大島畠田遺跡は、律令体制が衰退し、地方の有力者層が台頭しはじめる9世紀後半から10世紀前半、日本でも最大の荘園「島津荘」が成立する直前に形成された遺跡で、地域の有力者の様相を示す重要な発見となった。

遺跡の調査は、当初の予想を大きく上回る成果をあげることができたが、解決すべき問題は多い。一つは各遺構の時期、用途の分析および同時期遺構の抽出である。掘立柱建物跡の同じ分類の中には、隣接するものや重複しているものがあることから、さらに細分可能で、大型建物についても柱穴埋土の状況から建て替えも指摘されている⁽¹⁾。また、池状遺構から「泉」の墨書土器が出土しているものの、用水の導・排水の溝がはっきりしないことなど「池」として認定できる証拠が無く、埋没後のコの字状区画の時期や性格も検討すべき問題である。溝状遺構については、掘立柱建物跡や池状遺構との切り合いから屋敷地より時期的に古くなる可能性もある⁽²⁾。二つめは、屋敷地の捉え方である。屋敷地の範囲は東側の凹地までなのか、あるいは凹地を取り込んだ範囲なのか、今後の確認調査を待たなければならない。また、井戸や生産遺構などが見つかっていないことも疑問点として残る。さらに、屋敷地の正面を考えると、凹地の意味付けもあるが、遺構や地形の状況から東・西はあてはまらない⁽³⁾。南側については、区画施設を数回にわたり建て替えられており、正面の可能性もある。三つめは在地土器の編年の確立である。遺構の切り合いや遺構一括資料がいくつか出土していることから、形態差や時期差を認定することができると考えられる⁽⁴⁾。

最後に遺跡の性格については、これから遺構・遺物の詳細な検討を要するが、庄内川との合流地点で、9～10世紀代において、12世紀代同様、大淀川からの荷物の運搬が行われていた可能性があるなど、大淀川を利用する交通・交易の要所の押さえや低地の開発のための拠点の遺跡と考えられ、公的な施設というより地元有力層の邸宅と捉えたほうがよいかもしれない。最近の調査でも、丘陵上だけでなく大淀川の支流である丸谷川や横市川に面した沖積地微高地上に8～9世紀の集落が確認されはじめ、越州窯系青磁や緑釉陶器、墨書土器など出土している⁽⁵⁾。これは各河川ごとにそうした拠点の集落が点在していたことを示唆し、平季基が島津荘を開発する以前に、地元有力層による低地への進出（水田開発）が進められていた可能性は高い⁽⁶⁾。今後、遺跡の立地についての再認識、当時の政治・社会の状況や河川を利用した交通・交易のあり方を考えていく必要があるだろう。

註

- (1) 山中敏史氏の御指摘による。
- (2) 一部、陶磁器類で9世紀前半まで上る遺物も見られる。
- (3) 屋敷地が東側凹地までとしたら、門の位置や柵列1の切れるのが屋敷地の中央ではなく南西隅になってしまうのも違和感がある。
- (4) 越州窯系青磁や緑釉陶器を出土した中尾山・馬渡遺跡^{なかおやま まわたり}で、非常に類似した土師器類が出土しており、比較検討の重要な資料と考えられる。都城市文化課矢部喜多夫氏の御教示による。
『都城市遺跡詳細分布調査報告書（市内中央部）』『都城市文化財調査報告書 第5集』都城市教育委員会 1986
- (5) 「上ノ園^{うえの}第2遺跡」『都城市文化財調査報告書 第27集』都城市教育委員会 1994
「中大五郎^{なかだいごろう}第1遺跡・中大五郎^{なかだいごろう}第2遺跡・本池^{もといけ}遺跡・前畑^{まえはた}遺跡」『都城市文化財調査報告書 第34集』都城市教育委員会1996
「鶴喰^{つるはみ}遺跡」『都城市文化財調査報告書 第44集』都城市教育委員会 1998
「脇穴^{ひじあな}遺跡」『都城市文化財調査報告書 第47集』都城市教育委員会 1999
- (6) 野口 実氏、永山 修一氏の御教示による。



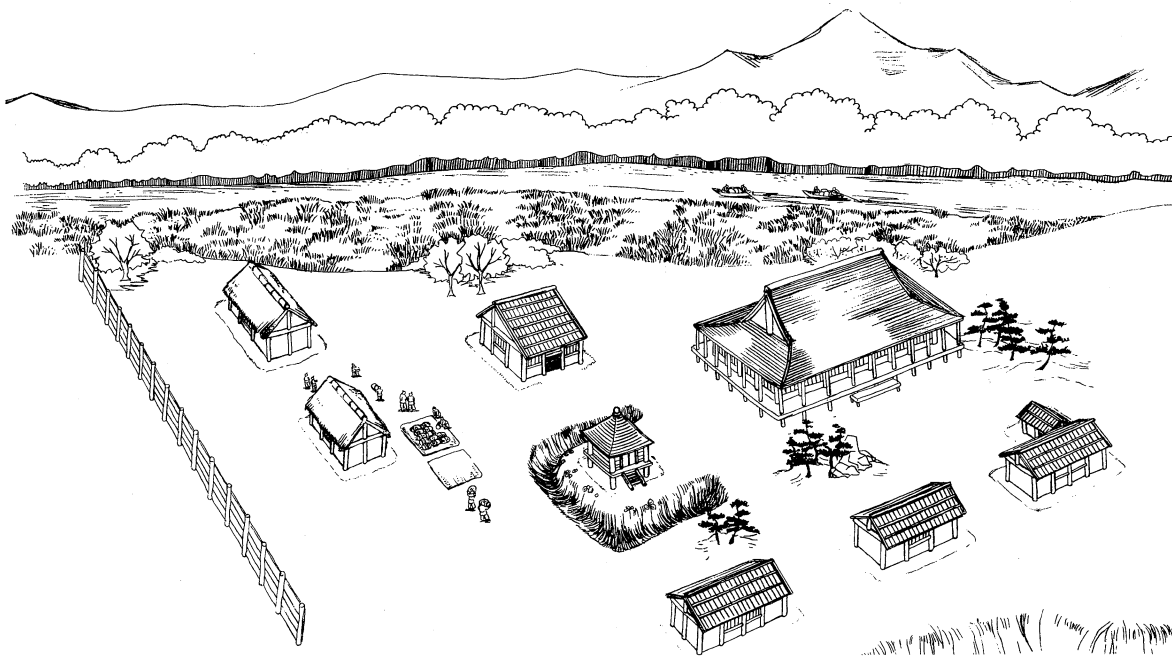
埋戻し作業



埋戻し作業

報告書抄録

フリガナ	オオシマハタケダイセキ					
書名	大島島田遺跡					
副書名	農用地総合整備事業「都城区域」区画整理に伴う発掘調査概要報告書					
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書					
シリーズ番号	第28集					
編集者名	谷口武範					
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター					
所在地	宮崎県佐土原町大字下那珂4019番地					
発行年月日	平成12年3月					
所収遺跡名	所在地	北緯	東経	調査期間	調査面 (㎡)	調査原因
オオシマハタケダイセキ 大島島田遺跡	ミヤコノジョウカナダチョウ 都城市金田町 付近	31° 46'	131° 04'	1999.1.13 ～ 1999.11.9	約10000	農業関連
種別	主な時代	主な遺物		主な遺物		特記事項
居館跡 集落	弥生時代中期 平安時代 鎌倉～室町時代	掘立柱建物跡 土坑 溝状遺構 区画溝 柵列 池状遺構 道状遺構 門		土師器 須恵器 黒色土器 墨書土器 緑釉陶器 白磁 越州窯系青磁 灰釉陶器 鉄滓		有力者の屋敷跡 大型建物



大型建物(SB1)と同時期に存在していたと推定される遺構の復原図(案)

宮崎県埋蔵文化財センター調査報告書 第28集

おおしまはたけだ

大島島田遺跡

農用地総合整備事業「都城区域」区画整理に伴う発掘調査概要報告書

No. 17

~~A020~~大島島田遺跡

A028

発行年月日 平成12年3月
 編集発行 宮崎県埋蔵文化財センター
 所在地 〒880-0212 宮崎県佐土原町大字下那珂4019番地
 TEL 0985-36-1171 FAX 0985-72-0660
 印刷 安藤印刷株式会社

宮崎大学 2009年8月